

# マレーシアにおける 多宗教共生にかんする実態調査研究 — クアラルンプール都市空間を例として —

多和田 裕 司

## 1 はじめに

今回の海外調査の目的は、マレーシアにおける「多宗教共生」の実態について、関連する文献資料の収集とフィールド調査をとおして、できるかぎり具体的に把握することにある。多宗教国家であるマレーシアでは、国教であるイスラームとそれ以外の諸宗教という対立軸が、マレー系と非マレー系という「民族」の違いとも結びつきながら、国家のありようを決定する重要な要素であり続けている。国家をイスラーム的色彩で覆いつくすのか宗教的多様性を維持するのか、あるいはイスラーム、非イスラームを問わず宗教的不寛容性が高まるのか否か等々のベクトルの複雑な組み合わせが、国家政策から人々の日常にいたるまでの、まさにその時々マレーシアのすべてを形作ってきたといっても過言ではない。

本稿では、「多宗教共生」の具体的あらわれとして、調査予定事項のひとつであるクアラルンプール都市空間をめぐる宗教状況について若干の考察をくわえる。ただし、筆者の調査期間（2003年1月22日から3月29日まで）と本誌発刊時期との関係から、以下の議論は概観的、暫定的なものとならざるをえない。本稿は、あくまでも今後の調査研究にむけての方向性を整理するためのものであり、最終的な研究成果報告は稿を改めて論じることにした。

なお、今回の出張では調査研究以外に、バンコク・サブセンター設置にむけての関連業務もおこなっている。

## 2 多民族多宗教社会の形成とクアラルンプールの発展

マレーシアの多宗教社会が現在の形を取るにいたったのは、19世紀イギリス植民地支配下のことである。14、5世紀頃にこの地に広まったイスラームを信奉するマレー系の人々にくわえて、植民地労働力として中国系、インド系の人々がそれぞれの宗教をともなつて移住してきたことから、宗教についてもいわゆる「複合社会」が形成されることになった。

クアラルンプールの街としての発展も宗教的な「複合社会」形成の過程と平行して進んでいく。19世紀に発見されたクラン川上流の錫鉱山の開発を契機として中国系移住者がまずこの地に集まり、次にイギリス植民地政府がその本拠を置いたことからいまへといたる街の発展がはじまった。中国系移民たちはクラン川東側に集住し、河岸に接する形で設けられた市場を中心に、現在チャイナタウンと呼ばれる地区が広がっていった。一方植民地支配者であるイギリス人たちは、川の対岸（西側）に政府機関を集め、自らの居住地をさらに西側の高台に求めたのであった。ちなみにクアラルンプールのこのもっとも古い地区にかんしては、いまでも西側から東側へと、高級住宅地、官庁街、クラン川、チャイナタウンというおおよそ当時そのまの構成を見ることができる。

これにたいしてマレー系の人々がクアラルンプールに大量に居住するようになるのは、独立

(1957年)以降のことである。この時期の都市移住者たちは一部のエリート層をのぞいては中国系の人々に比して経済力もなく、市域のあちらこちらにいわゆる無断居住区をつくりながら定着していった。

このようなクアラルンプールの姿を一変させたのが、1970年代から導入された「新経済政策」とそれとともにマレー系優遇策の強化である。両者は街に次のようなふたつの変化を引き起こした。すなわち、ひとつは政府主導型の経済政策が直接、間接にもたらしたクアラルンプールの再開発であり、いまひとつは都市移住者の増加とともにクアラルンプールの郊外への拡大である。

前者は、主としてクアラルンプール中心部における老朽化した建物を取り壊しての高層ビルの建設や新交通システムの導入などに見ることができる。かつての競馬場跡地を再開発したペトロナス・ツインタワーとその周辺の緑地整備はその典型である。他方後者は、経済や教育において政府の強い後ろ盾に支えられながら都市に移住したマレー系がその原動力となっている。彼(女)らはおもに、クアラルンプール郊外に広がる新興住宅地に暮らすホワイトカラーで、経済成長とともに急増する中間層の核心部分を構成している。彼(女)らの増加とともに住宅地が郊外へと伸張したことにより、クアラルンプール市域(厳密な行政区域を意味しているのではない)が急速に拡大した。

### 3 都市空間をめぐる宗教の共存と対立

クアラルンプールにおける各宗教の地域的な濃淡も、上述の街の発展史を映し出すようなものとなっている。中心部の街の土台が築かれた地区にはキリスト教会が点在し、中国系の廟や仏教寺院が見られるのもチャイナタウンとその周辺である。一方、郊外の住宅地には、地方のマレー系村落そのままに各地区ごとにモスクが建てられ、周辺に住むムスリムを、出身地の違いを越えてモスクを中心に結びつけるような役割を果たしている。(注:マレーシアの各州は独立以前はそれぞれが世襲の統治者を持つ王国で

あった。そのため言葉や帰属意識などにかんして州ごとの独自性が強い。)

このような都市における宗教的「棲み分け」とも呼べる状況にたいして、近年のクアラルンプールの発展は、街の姿を以前とはまったく違ったものにかえてしまうとともに、従来の共存のありかたとは異なる新たな宗教状況をもたらすことになった。それは、クアラルンプールにおいて現在観察される次のようなふたつの現象のなかに具体的に見て取ることができる。すなわち、ひとつは各宗教の、とくにイスラームと非イスラーム諸宗教の間での、都市のかぎられた空間をめぐる争いであり、いまひとつは政府のイスラーム化政策とともに進展する都市景観のイスラーム化である。

前者は、都市への人口集中により各民族集団の混在が一層進んだ結果、宗教施設(モスク、教会、寺院など)建設や埋葬地をめぐる対立として顕在化してきたものである。とくにマレー系住民の増加が顕著な郊外の住宅地においてこの傾向が強い。宗教施設の建設は通常州政府が任命する地区委員会によって決定される。しかし、マレー系すなわちムスリムが政治的主導権を握りイスラームを国教とする国家にあってはイスラームと非イスラーム諸宗教の力関係における「優劣」は明白であり、非イスラーム諸宗教の側には、公的なものと暗然としたものとを問わず、つねに「規制」や「抑圧」が働いているとの思いが強い。

後者は、近年立ち並ぶクアラルンプールの高層ビルや代表的建築物の多くに、イスラーム的な意匠がもちいられていることなどに見ることができる。従来クアラルンプールを代表するものであったコロニアル建築と中国系のショップハウス(1階部分が店舗や倉庫で2階以上が住居になっている)は、観光の対象として「保存」されるか取り壊されるかのいずれかであり、それにかわってモスクの尖塔やドームをデザインに取り入れたビルが建ち並んでいる。この変化はたんに都市景観だけについてのものではなく、クアラルンプールという街そのものを宗教(=民族)を軸に再編することをも意味している。すなわち街の中心が、かつてのクラン川とチャイナタウン周辺地域から、商業的にはこれ

もモスクの尖塔をイメージしたペトロナス・ツインタワーを核とするクアラルンプール・シティ・センター（KLCC）へと、また政治的にはやはりイスラームのモスクを彷彿させる建物である首相府を中心に郊外に開発されたプトラ・ジャヤ新首都地区へと移っていったのである。

クアラルンプールという都市空間の宗教状況における「並存」から「イスラーム化」へという移行は、もちろん、近年耳にすることの多い「イスラーム国家マレーシア」という旨の一部マレー系指導者たちの言説や、法制レベルでのイスラーム法の拡大傾向（正確を期すれば「そのような指向性の強まり」となる）と軌を一にするものである。

#### 4 比較研究の可能性

クアラルンプールを例に概観した都市をめぐる宗教状況は、他の都市との比較のなかでより一般的な議論として展開できるはずである。

たとえば今回の調査で滞在する機会を得たバンコクにおいては、圧倒的な存在感を示す数多くのタイ仏教寺院が王宮やチャオプラヤ川兩岸の街の中心部に位置しているのにたいして、タイ王国の南北両周縁域からの移住者の子孫が主たる担い手であるモスクは、街の東側の初期バンコク形成期には周辺的な地域であったところに点在するのみである。バンコク東部のチャオプラヤ川の無数の小さな支流を利用した水路沿いに点々と建ち並ぶモスクの姿と、おなじく東部ではあっても新たに建設、整備された街道沿いに並ぶ工場群とを比べると、（もちろんもっと詳細な調査が必要であることはいままでのないが）タイにおける国家建設とエスニシティ、多宗教状況、開発の方向性などの一断面をはっきりと見て取ることができよう。

本稿で論じたような都市の宗教状況をも含めて、今後の調査研究の展開としては、マレーシア各都市、あるいは東南アジアの諸都市において同様な検討を重ねながら、東南アジア諸国に共通する課題である多民族多宗教の共生について考察していきたいと考えている。